
1 3 2 番目のロビン尊

シバ精神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

132番目のロビン尊

【コード】

N9352M

【作者名】

シバ精神

【あらすじ】

“ロビィ”。それはある大陸における英雄の呼び名である。これはそう呼ばれた者たちのなかでも、最も強いが、最もその名にふさわしくないと言われたある少年の物語である。

序章 端都の惨劇

端都の惨劇

波打ち寄せる海岸。朽ちた人家が陸側に建ち並んでいるが、人の気配は全くない。

そこから陸のもつと奥のほうに視点を移動させると、石の防壁に囲まれた町が見える。

ここには人が満ち溢れ、防壁のうちに作られた畑やより町の中心にある市場、学校にはそれぞれの営みを行う人々が見受けられる。

海岸側から見るとは左方向にある防壁。この四人ほどの武装した衛兵が守る防壁の入り口。その向こうにある岩壁から、この町と同じくらいの人の気配がする。

そのほうに目を置いておくと……。その上から「ひよこ」と大人数の人影が顔を出す。

町を見下ろせる崖に、馬とそれにまたがる人間、騎兵が集まっている。

その先頭に立つ男。そこにある騎兵の誰のものよりも巨大で立派な鬣たてがみを持った馬に乗る彼。長髪で鼻の下に少ない髭ひげを生やし、たくましい肉体が開けた黄色い上着から見えている。その腰には刀が備え付けられているのも見える。

その男は、“二指を立て、それを「クイツ」と町のほうを指差す”動作により、後ろの騎兵等の進軍を促す。

それとともに、崖の傾斜緩やかなところを馬軍が駆け下り、「ドツドツドツ！」と地を鳴らす。

それを指示した男も馬を進める。
その先は断崖絶壁。駆け下りられそうな傾斜ではない。
それでも、彼の操る灰色の馬は足場がなくなる前にまで進み、そこから跳び降りた。

町の防壁外側を守る二人の衛兵らがその地鳴のほうへ目を向けると、馬軍がこちらに向かってくるのがわかる。
それを彼らは「騎兵！」と戦闘態勢をとる・・・。

そんな彼らが見上げた頭上。そこには巨大な影があり、それが地に作り出す陰が衛兵らを覆う。
次の瞬間、衛兵らの近くに何かが落ちてきて、その落下の衝撃により二人は吹き飛ばされる。

同じくその衝撃に巻き上げられた土煙が辺りを隠す。しばらくして、そのなかから、巨馬に乗った馬軍のリーダーである男が現れる。

衛兵らは飛ばされながらも、立ち上がり戦おうとする。
それへ男は肩に装備していた短剣を指の間に挟み持ち、その状態から二人それぞれのほうへ短剣を投げつける。

その短剣は立ち上がるうとしていた二人の喉もとへと突き刺さり、衛兵は絶命。

男は仲間たちに先駆け町の中に入り込む。

異変には防壁内側を守る二人の衛兵も気づいていたが、外側へ向かおうとするとき、その前に巨大なものが立ちはだかる。

「で、でけええ」と衛兵が驚く先にはさっきの巨馬。
これに驚く間に男はさっきと同様、短剣投げでこれを瞬殺。

そして、彼の登場に唾然としていた町民らへ、その腰刀をもって次々と斬りかかる。

彼が二三人、仕留めたところに、崖を降りた馬軍が追いつく。次々と町へと入ってくるそれらへ男は命令する。

「この町のすべて……奪い、殺し、壊しつくせ。我らが悪名、世に知らしめろ！」。

その号令のとおり、「奪い、殺し、壊し」の行為が町民らを襲い、町の各所で叫び声が鳴り響く。

進入した防壁のまわりを一掃した頃、町に銃声が響く。

その銃弾に騎兵の一人が倒れる。

これに、

「銃というやつか。だが……問題はなし」とその死兵の近くにいた男は、その攻撃をした町内防壁の窓から顔を出す銃兵のほうへ馬を進める。

腰の辺りから紐のついた球体を取り出し、その隣で紐をまわす。まわる紐の先端にある球体の重さのためか、次第にそのまわる勢いは強く速くなって、その勢いのまま銃兵のいる窓へ球体を放り込む。球体の様子がおかしい。それとつながるもう一本の短い紐に火がついている。紐は一瞬のうちに短くなっていき、そして……。

「どおおおんー！」と爆音が町に、そしてその町の周辺にまで轟いた。

襲撃の町、その東の森。

そこで爆音を聞き、爆煙を見て、

「あれは……タルト！急がねばならぬようだな」と金髪、青目、青い衣を身に着けた青年。赤く美しい鬘をした馬に跨り、またが腰に剣と

袋、その背に弓と矢袋、という姿で武装している。

彼は彼がタルトと言う町へ向かい、馬を急がせる。
森を駆け、森を抜けて……。

彼はタルトへたどり着く。

しかし、一足遅かった様子。場は静まり返り、住民の生気も、襲撃者の気配も感じない。

青の青年は、死体が転がり、住宅が壊れたこの惨状のなかで馬を歩ませる。そして、その死体のひとつを見て、立ち止まる。

「マリアナさん……」と女性の死体を見ていう。知人のようだ。

彼は馬を降り、女性の死体へ近づくと。

近づいてみると、彼女は何かを抱えている。赤子のようだ。

もっと近づいてみるとそれが生きているのがわかる。

それは、この惨状にもかかわらず、泣き喚きもせず、ずっと息を潜めている様にも見えた。

彼は、マリアナの腕から赤子を取り出し、その腕に抱える。

赤子は他人の彼に馴れ馴れしく甘えんとする。

それに彼は、赤ん坊から顔をそらすとする。

そのそらした先、ある紙が短剣で刺して張つてあるのが見える。

紙には文字が書かれそこにはこう。

「残虐！非道！なんでもやります！我らは“東風”！悪商、悪官の方々、ぜひ御使いを」。

この張り紙を外し懐に入れ、彼は再びマリアナのもとへ向かう。

彼女に近づくと、赤子を持つ手とは逆の手が開いたほうの手で、

その身体を抱え、町の西門、騎兵等が襲撃してきたほうの門へ向かう。

その門を出たところ、武装した兵士の軍団に出くわす。それらは、「貴様なにものだ」とか、

「タルトを襲ったのはお前か」とか、
女、子供を抱える彼へ問いただす。

軍団の後ろから、

「その人は、私たちの味方です」と子供のような顔した青年が出てきて兵士をなだめる。

それに兵士等が落ち着くと、青年はそれらに話す。

「この人は、ラール大陸における英雄の称号、ロビイの名で呼ばれる御方だ。つまり、わが国において独立騎士の位にある方だ」。

「おお」と彼らの国において伝説級の人物に会えたことに感動する兵士たち。そのまなざしはさつきまでのものとはまるで違う。

説明を終えた青年は異様な様子のロビイに聞く。

「その様子は……！ロビイ様、タルトはどうなっただんです！」。

それに、ロビイと呼ばれる男。

「貴様も、將軍なら、自分の目で見て、自分で判断しろ」

と何も伝えず、その軍隊がやってきたほう、タルト西の山岳のほうへ重荷を背負い歩いていく。

タルトの西、山岳を少し進み南の海辺への道を行くと、そこにはタルト町民が代々使ってきた墓場がある。その墓のなかのひとつの前で、ロビイは赤子を抱え立ち尽くしている。

その後ろから声をかけるものがある。さっきの青年将官である。

「その武力を以って慕われ、武力を以って盟友を守るべき盟主がこの様とは、情けないことです」

それに同調し、ロビイ。

「ああ、情けない。友ひとりも守れないとは。何が英雄か」。

そんな自らを攻めるロビイへ将官は聞く。

「それにしても、あなたを出し抜いて、町ひとつを一瞬で壊滅させるとは何者でしょうか」

それに、ロビイは懐から紙を取り出しそれを将官へ見せる。

「これは・・・？」と将官。

それはさつき、タルトの壁に張ってあった宣伝の紙である。

「これは東羅文字ひがしローマ文字ですね。え〜と、残虐、非道・・・、「東風」？・

・・・“とうふう”？」。

と将官が文字の解読に手間取っていると、

「たつみ」と呼ぶのだろう」と教えるロビイ。

そして、内容がわかった将官。

「この内容によれば、商人から仕事を請け負う暴力屋のようですね」。

その内容にロビイ。

「ああ。宣伝はそれで十分。ならば、次は闇商人ともとの接触を計る筈」。

それに将官。

「“闇商人”・・・。それなら、“るまむきつず”の出番ですね」。
続けて

「助言、有難うございました。これから、「るまむ」の里まで行き、情報の調達後、奴等を追います。時間がありならご同行を」とその情報を得ると、将官は足早にこの場を去ろうとする。

しかし、ロビイはそれを呼び止める。

「おい、待て」。

幼顔の将官がその声に止まり、振り向くと、ロビイ。

「わざわざ“るまむ”までいく必要ないだろう」。

それに、「え？」と将官。

「一軍を率いる身で知らんのか。全く・・・」
とロビイは言って、一息つき、

「やっぱり、女は貧乳だよね〜」と突然叫ぶ。

それに将官、「はあ？」と。

そして、その声の後すぐに、

「そつだよね〜」。

と墓土のなかから奇怪な老人が顔を出す。その頭ははげて両耳の近くに白髪が生えているだけである。

そして、老人は土のなかから這い出してきて、全体を頭にする。それは、将官やロビイの体の半分ほどの大きさしかない。

驚く将官へロビイが説明する。

「いいか、リオルク。わが国で闇を生き、闇に動き、闇を知る“るまむ”の隠密は、国のあちこちにこうやって潜んでいる。だからこそ、その悪商人を取り締まる役目が務まるのだ」。

そして、老人の着物の首の後ろをつかみ、猫のように持ち上げ続ける。

「そして、こいつ等の情報網は広く細かく早い。それゆえ、将たるものは彼らから聞くことで、敵の情報を得ることができる」

それにリオルクが質問。

「あの、さっきの恥ずかしい言葉は、合図ですか？」。

それに答えたのは老人。

「そうじゃよ。だって、こんな奴があんなこと言ったらおもしろいじゃん」。

それに、「はあ」とリオルク。

質問に答えた老人は、青い青年のほうを向き、

「ところで、ロビイ。何の用じゃ」と。

それに、ロビイはリオルクを指差し、

「用があるのは、こっちですよ」と。

それに老人は、身体をリオルクのほうへ切り返し、「何のようじゃ」と。

それにリオルク、

「あ、はい。えくと、タルトを襲撃したもたちの行方についてですが・・・と」。

それに老人、気の抜けた声で、

「あいつらね・・・。あいつらなら、もう部下に探させてるよ。も

う数分でわかんじやない」と。

それに、リオルク、

「すごい、もう動いているとは……。さすがですね」と。

その話が終わるとロビィ、いつの間にか呼びつけていた彼の赤き愛馬に乗り、どこかに向かう様子を見せる。そして、

「リオルク。追うのは少し待って、タルトの人びとを埋葬してくれないか」と。

それに、リオルク、

「あ、はい。任せてください」。

今度は、老人のほうを向いてロビィ。

「リユーマさま、私はルワーフへ戻ります。かの賊の在り処、わかつたときにはかの地にいる私にも伝えてください」。

そして、赤子を抱える片手を使わず、もう一方の手だけで馬を操り、墓場の出入り口のある岩の谷間のほうへ駆け出し、あっという間にその姿は見えなくなつた。

草原を駆ける赤馬。

その先には防壁、その向こうには町、そのまた向こうには丘の上に建つ城。

ふと見ると、防壁の門。城堀の上に架けられた橋が上がるうとしている。

ロビィは馬を急がせ、神速に門の前まで来る。橋は上がりきつてはいないが、門への地道は立たれている。これを赤馬はロビィの掛け声とともに跳び上がり、上がり閉まらんとする橋と門の天井の間を抜けて、何とか門を抜ける。

着地後、「ロビィさま!？」と門の衛兵に名を呼ばれるが、立ち止まることなくロビィは丘の上の城のほうへと駆けていった。

城に入り、まっすぐ行ったところにある謁見の間。その奥には玉座があり、その前にロビイがひざまずいている。

その玉座の左にある出入口、玉座に座るべき権力者のみを使うことから、この部屋に向かう誰からの声が聞こえる。

「ロビイと会うのは何年ぶりかしら」と少女らしき声。

「約三年ぶりの帰国でございます」と少し大人の女性の声。

「三年か・・・」とつぶやきながら、飾り立てられた衣を纏った少女が玉座左から現れる。

そして、彼女は玉座に向かいながら、

「長い旅、お疲れ様でした」と。

そして、玉座に座り、

「いろいろと厄介なことに巻き込まれていたようで、遠い空から心配していましたよ」と少女。

それに、

「もったいないお言葉でございます」とロビイ。

そういう彼の手に何かが抱えられているのを少女は見つける。

「それは、赤ん坊ですか？・・・まさか、あなたの・・・」と少女が不安そうに聞いてみる。

ロビイは突然、

「バンッ！」

と開いた手を拳にして部屋の床に落とし、その身体も低くして、

「申し訳ございません。端の都、タルト。暴徒どもの手より守れず、壊滅いたしました・・・」

とあの悲劇を報告する。

「壊滅！？リオルクを送ったはずですが・・・」と少女。

「リオルク隊。行動、早けれど、敵はそれを上回る速さで、町壊滅を成し、私、將軍、着きしときには、すでに遅く……。」とロビィ。残念そうな顔をする少女にロビィ。

立ち上がり赤子がよく見えるようにして、

「この子は、かの村の生き残り……、王宮で世話していただこうと連れて参りました」

とロビィ。

それを聞き少女。

「たったひとり、生き残るなんて、可愛いそうな子ですね」

と言い、少し間を置くと、何かを思いついてようで、

「そうだ。ロビィ、この子を次のピーチルにしましょう。まだ、候補も決っていませんし」と。

それにロビィ、

「いえ、姫様。それはなりません」と反対する。

それに姫、

「なぜ？この子には父も母もない。人びとに愛されうるかわいさもある。条件は十分に満たしているはずでしょう」と。

それにロビィは説明する。

「私は、その子を、次のロビィに育てようと思っています。実はその子、私が仲人をした夫婦の子でして、私は彼女らを自らの力不足で死なせてしまいました。だから、私は彼女らを守ってあげられなかった代償に、その子を立派な人間に育てたいと思っています」。

「そうまで言われてしまうと……ね」と姫。

「うん？」と彼女は赤子の何かに気づく。姫は、ロビィのもとによって来て、

「この子、お腹空いてるんじゃない？」と。

それに子供の世話を全く知らないロビィ、

「たしかに、ここに来るまで何も食べさせていませんでしたが」と。彼女は、

「ダメですね。父親失格ですよ」

と叱り、ますますロビィへ近づく。

それにロビィが、

「はい。情けないことで」

と言っている間に、

姫はその腕から赤子を取り上げる。

そして姫、

「やっぱり、このくらいの子はお乳かしらね」とその衣をいじり始める。

それにロビィ、赤面し、

「姫、私の前でのそれはお止めを」

と彼女がしようとしたことを留める。

彼女は赤子を抱えたまま、玉座に戻り、玉座近くのロビィ側からは白幕で隠れたところにいる召使へ、

「キノ、幕を下ろして」と。

それに従いキノが動く、玉座前の白幕は下ろされ、ロビィ側からは姫の人影だけが見える。

どうやら、赤子へ乳を与えているようだ。

それを見てロビィ、

「乳は子を産まねば、出ないと聞きますが・・・」と。

それに現状を報告して姫、

「出ますよ」と。

それにまた、ロビィは赤面する。

しかし、一瞬でまじめな顔に戻り、立ち上がる。そして、

「姫、その子のことはしばらくあなたに任せます」と。

続けて、

「私はそろそろ失礼させていただきます」と。

それに姫、

「また行くのですか。帰ってきたばかりなのに・・・」と。
それにロビイ、

「タルトを襲ったもの、野放しにはできません。リオルクがしくじるようであれば、ルワーフ全体の治安に関与します。私の手で確実に討っておかねば・・・」と。

それに姫、

「そう、それはしかたないですね」と。

そのようすにロビイ、

「事が済めば、また帰ってまいります。ご安心を」と。

それに安心したのか姫、

「わかりました。ロビイ、このこと、頼みますよ」と。

それに「御意」と彼女へお辞儀し、事へ向かうロビイ。

城を出ると、音もなく何かがロビイの隣に現れる。

「ロビイさま。タツミの在り処、つかめましてございます」。

ロビイが聞こうとすると、“るまむ”の隠密は伝える。

「タルト南の海岸に二人、タルト西の山岳に七人、タルト北の雪山に二人、タルト東の森に一人、ルワーフ南の森に十数人、ルワーフ城下町に五人・・・」。

各地に散らばった賊の在り処を聞き終わると、ロビイは隠密へ聞く。

「そのなかで、最近闇商人が動いたという噂あるのは・・・」。

それに隠密。

「はい、最近雪山のあたりに我らが悪商候補とするノゲイタという輩が入ったようです」。

それを聞きロビイ、

「そこだな」とタルト北の雪山へと向かう。

タルトの北、ルワーフの南、両都市に挟まれたところに、雪山、

ハイドラ山がある。

ここは、それほど北国というわけではないが、その山の高さ故に雪が積もっている。山の麓は温暖で住み良く、人の住む町もいくつかある。

その町から山を登った、町外れ。歩きづらく、凍えそうな寒さの銀世界の林に、木造の小屋が建っている。

その周りには、上にいくほどに細くなっている氷の柱。このあたりでは、“逆さツララ”と呼ばれているものである。それが、小屋の周囲を見渡せば、数本地上から生えているのが見える。

氷の林にある小屋に目を戻すと、どうやら人の気配がする。

小屋の窓から見るに、タルトを襲った男と、知らぬ黒髪の誰か、話している。

「シードです」と襲い人、「ノゲイタといいます」と黒髪人、お互いに自己紹介し、椅子に座り、机を挟んで、話し出す。

ノゲイタが言う。

「かの悪行、聞いていますよ。一国へ喧嘩を売る度胸、神出鬼没の行軍、瞬く間に町ひとつを壊滅させる侵攻。頼りになりそうな方々だ」。

それにシード、軽く頭を下げ、
「どうも」と。

そして、ノゲイタは自らの職について話す。

「私は田舎の者たちを、騙し侵す仕事をしている。時には、村人をさらい、資源を乱獲し、時には、無知の田舎者から金を騙し取り、時には仕事を進めて奴隷とする。こんな仕事をあなたは手伝うことになるが・・・、どうかね」。

それにシード、

「町をひとつ壊滅させた我らに、いまさら躊躇うような悪行がありましようか」と。

それにノゲイタ、
「たしかに、それ以上の悪行は、そうありませんな」と笑う。

話す悪人たち。そこに、小屋の戸が開き、冷や風が部屋の中に吹き込む。

その開かれた戸に、その風を背に受け、青き衣をなびかせて、男が立っている。

それを見てノゲイタ、

「青の服……。ラルルの英雄、ロビイか」と確認すると、背を向け、ロビイから見て小屋の奥にあるもうひとつの出口から出ようと動く。

そして、シードのほうを向き

「さっそく、頼みます」とノゲイタは、出口の戸から飛び出し、雪上を駆ける。

ノゲイタが戸から飛び出したとき、ロビイは背より弓と矢を取り出し、構える。その先は小屋の木の壁。シードも奇妙に思っている。しかし、ロビイの目は別のものを移している。それは雪上を走り、雪上用の乗り物へと向かおうとするノゲイタの姿。ロビイには壁の向こう側まで見えている。よく見れば、その目は片方だけ緑色をしている。

ノゲイタが乗り物に乗ったとき、矢が放たれる。

それは木の壁を突き抜け、ノゲイタの身体をも貫通する……。

それを見て、シード。

「壁越しに！」と驚く。

しかし、次の瞬間笑みを浮かべ、

「全く、やってくれる。俺の客を……。これで、俺たちの信用はガタ落ちだ」と。

そして、腰に差した刀を抜き、
「この回復、きさまを倒してさせてもらおう」と正面にある木机を真っ二つにする。

正面の障害を退かすと、シードは肩に差した短剣を二つ、時間差でロビイに投げつける。

これを、軽々と避けるロビイ。

しかし、それは誘い。その間にシードは避けて移動したロビイの懐にあり、切りかかるうとしている。

この状況に、

「よし、捉えた」とシード。

しかし、ほんの一瞬、彼に恐怖がよぎる。

その恐怖のまま、後ろへ退くシード。

その眼前を、ロビイの剣が起こす風圧が駆ける。

それにシード、

「あの剛と俊、両面を併せ持つ居合い……。進めば、刀ごと真っ二つにされていた……。」と。

そんな怯えるシードへ、

「ロビイたるものの基本は、剣術、弓術、馬術。千数年、受け継がれし、この技、暴賊ひとりには越えられない……。そして、それに加えて……。」とロビイ。

腰につけた皮袋から球体を取り出す。

それはシードも知っている、このあたりでよく使われる、「爆弾！」である。

シードはそれを見て逃げる姿勢を見せるが、ロビイはそれを投げる気配を見せない。これに、シードは奇妙に思い、立ち止まり、爆弾をその手に持つ男を見つめている。

見る見る、導火線が短くなっていき、次の瞬間。

ロビイはその青き衣の袖から、手裏剣を取り出し、それを二つ、シードへ投げつける。

シードはそれを、「キンッ」、「キンッ」と刀ではらう。

敵の攻撃を退けた後、シードは気づく。

何かがその手に巻きついている。それは鋼の紐。その紐の端には、「指輪!?!」。

次の瞬間、ロビイは手に持つ球体を、手のひらを傾け、床へと落とす。そして、それが床に着かんとするとき、

「ポイント・チェンジ」と。

すると……。ロビイとシードの立ち位置が入れ替わる。

移動したシードの足元には危うい球体がある。

それは、もう爆発する……。

「BOOOOW!!!」。

小屋の戸は爆煙に包まれる。その間からもそのあたりの材木が焼け壊れているのがわかる。

シードは、かろうじてその場から逃げ出したようで、雪上に倒れこんでいる。

そのようすを爆煙のなかから見つめる影。それは次の瞬間、煙を突っ切り、倒れるシードのもとへ飛んでくる。

それに、立ち上がるうとするシード。

「雪上!!!」と、すべるためか、足場が悪いのか、立ち上がれない。

それへ、ロビイの縦斬りが襲う。

これを、シードは何とか手に持った刀剣で受け止める。

力と力とのつばぜり合い。

それに押され危うしと感じたシードは、その足で敵の足元をすくおうとする。

それに、ロビィは飛び上がる。

空中にあり、“踏ん張りがきかない”を好機と見たシードはここで押し返さんとする。

しかし、押し返せない……。シードがロビィの足元を見ると、「足が宙に浮いている!」。

ロビィはその状態から、「ブーツ・チェンジ」とつぶやき、その声とともにその履いていた靴が変わる。

ロビィは足を曲げ、蹴る様子を見せる。

それにシード、

「あれは重い!」とまた恐怖する。

ただでさえ、押されているつばぜり合いのなか、シードは剣を持つ片手を離し、より押されながら自らの上着のうちの腰あたりを探り出す。

そして、そこから例の球体を取り出し、彼は自らの隣にその危うきものを転がした……。

ロビィの重き蹴りが繰り出される前、それは早くも爆裂する。

「ぼおおおおおん!」

その爆発により、シードの身体は飛び、ロビィのもとから離される。

雪上にまた倒れた彼は、すぐさま立ち上がる。その右腕は負傷し

ているようで、流血している。

シードは「まだ動くな」とその腕が動くのを確認すると、ロビイがいたほうを見る。

ロビイは、爆発したほうへどこから取り出したのかわからない盾を向け、どうやら無傷のようだ。

それを見てシード、

「これは・・・、一旦退いたほうがいいみたいだな」と微笑み、

“右手の指の間に二本の短剣を挟み、左腕で長い紐をついた球体を「ぶんっ」「回す”姿で迎え撃たんとする。

これにまたロビンが飛んで向かってくる。

それにシードは短剣をひとつ投げ、これをまた囷に、ぶん回した紐の勢いそのまま爆弾球を投げ、ロビイにくらわそうとする。

しかし、ロビイは空中でも自由に飛び跳ねる動きで楽々避け、シードの目の前まで近づく。

そして、剣を振らんとするロビイ。それを短剣で受けようとするシード。

しかし、ロビイは剣を振らず、その逆の手に持っていた盾を前にして、ロビイの剣に応えようとしたシードの短剣はそれに弾かれる。そして、ロビイは弾いたその盾で、シードを殴りつけ、その勢いそのまま彼の身体を雪上の押さえつける。

盾にはその向こうを見るための穴が開いていて、ロビイはそこから、剣を通し、息の根を止めようとする。

「とどめだ」。

「じゅお~~~~ん!!」。

そんなロビイの背で何かが発火する。おそらく、さっきシードの投げた爆球であろう。

気にせず、シードみ止めをさそつとするロビィ。

しかし、彼を何かの影が覆う。

振り向くロビィ、

「氷柱！」と。

彼らのところに、小屋の周りにあった巨大な逆さ氷柱が折れ倒れてくる。

その衝撃により、雪煙が舞い上がり、あたりの視界が失われる。それを見てロビィ。

「さっきの攻撃はこれのためか。これでは逃げられるな……」。

倒れる氷柱を避け、この機に逃げようと雪煙のなかを駆けるシーン。^{下。}

しかし、その背後に妙な音がする。

「」おおおお

ロビィもこれを感じ、

「これは……。雪崩か……。墓穴を踏んだようだな」と。彼はそれにも余裕を見せている。

雪崩がロビィの背に迫ると、彼は高く飛び上がり、その飛び上がった高さのまま宙を浮き、雪崩がいく様子を見つめる。

雪崩、今度はシードの背に迫る。彼に逃れる術はない。そのまま、この悪人はその雪のなかに消えていった。

男はしぶとい。

白いなかを這い登り、なんとか地上へと顔を出す。

しかし、その眼前にはロビィの剣が突きたてられている。

「悪運の強い男だ……。だが……。ここまで」とロビィは剣を

振らんとする。

「どおおおん」。

何かの衝撃が、ロビイを背後から襲う。

衝撃に飛ばされながら、そのほうを向き、着地するロビイ。その目には、

巨大な馬の姿があった。

それを見て、シード。

「ハインライトか……。よくきてくれたな」。

そして、その灰馬に登り乗り、ロビイのほうを向き、

「もうここへ来るつもりはない。きさまのような奴に命を狙われては、危ういからな。それでも、俺に会いたいというなら、東の“黄金平原”へ来い。そこで待てば、俺は必ず帰ってくる……。では、さらばだ、強敵」と。

それを言い残すと、ハインライトを走らせ、雪原を駆けていく。

ロビイはそれを射抜こうとするが、その速さに無理と悟る。

そして、時は過ぎ……。一年後……。

ロビイは、幼児を隣に、謁見の間にいる。

そんな彼へ姫、

「では、気をつけて……」と。

それにロビイ、

「はい……。有難うございます」と。

そういつてロビイ、幼児の手を引き、城の出口へ向かおうとする。

しかし、進んですぐ立ち止まり、姫へ言う。

「姫様。今度、私が帰ってくる頃、もうあなたはピーチルではありませんね。そのとき、私とあなたは、対等な「人」と「人」。自分の気兼ねなく付き合っけていけるようになるわけです。姫さま、今度、帰って来ましたら、私と……」。

それに、姫は顔を赤らめる。

そんな、彼女に続けて、

「……いっしょに、酒を飲みましょう」とロビィ。

その言葉を残し、その場を去っていく。

その言葉を聴き、少女。

「そういえば、酒好きでしたね。あの人……」と、
その背を見送る。

ロビィと幼児はルワーフが遠くに見える平原をゆく……。いず
こかをめざし……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9352m/>

132番目のロビン尊

2010年10月8日13時39分発行